

梶田勲一著「教育評価〔第2版補訂2版〕」〈有斐閣双書〉有斐閣 2010年9月10日刊を読む

学習指導におけるねらいとねがい

1. (1) 学校では、この時間の中で、これだけのことは何とかわからせたい、できるようにさせたい、体験させたい、といったねらいが、はっきりした形で教師の念頭になくしては、良い授業は期待できない。

(2) またこれと同時に、この時間での活動を次の時間へ、そしてまた次の時間へ、と積み上げていく中で、これこれのことが学習者自身の中に少しずつ形成されていってほしい、深まってほしい、実現してほしい、といったねがいが教師の念頭になくしては、良い教育にならない。
2. (1) もちろん、ねらいやねがいを持たないままでは授業そのものが不可能、というわけではない。

(2) たとえば、教科書を忠実になぞっていく、といった授業である。

(3) しかし、ポイントも見通しもはっきりしない授業では、いくら教科書通りにやったとしても、どの子もきちんと学力をつけるなどということは、とうてい無理である。

(4) それだけではない。教科書をなぞっていくだけの授業からは、学ぶ喜びも心の躍動も期待できない。

(5) ねらいもねがいはっきりしない授業は、結局、学習者にとって「実りのない苦行」になる恐れが強いのである。
3. (1) たしかに、もう1つのやり方として、教科書や指導要領にこだわらないで、子どもの側から自由に授業を構成するという方法も考えられないわけではない。

(2) 教師の側からのねらいやねがいなどということは考えないで、子どもの興味・関心や問題意識に即して1人ひとりなりに学習を進めさせよう、という教育方式である。

(3) これならば、心を躍動させ、学ぶ喜びを味わえるといった活動が、あるいはできるかもしれない。

(4) しかし、1時間や1日ならばそれでよいとしても、1年間、6年間、9年間、12年間と学習の着実な積み重ねをはかっていくためには、そういう行き当たりばったりのやり方では、どうにもならないのである。
4. (1) ねらいをはっきりさせるということは、教えようとする教材、題材について、そして展開しようとする活動について、本質的な意味での重要性をもつポイントは何か、を明確にすることである。

(2)そしてそのポイントをいつまでも頭に置きながら授業を展開していく、ということである。

(3)またこのことは、そのポイントが学ぶ側の 1 人ひとりにどう受けとめられ実現していきつつあるか、といった視点を堅持しつつ、学習者の姿を、そしてその変容を見つめ、1 人ひとりに必要な指導を臨機応変にかけていく、ということでもある。

(4)だからこそ、授業でのねらいは、1 時間の授業、1 単元の教材・題材を越えた大きなねがいに支えられていなくてはならない。

(5)1 学期・1 学年を通じて、学ぶ側でいったい何を得ていったらいいのか、そもそもその教科の学習を何年間も積み重ねていくということの意義はどういう点にあるのか、といったこととの関わりにおいて、当面のねらいが明確化されなくてはならない。

(6)つまり、学期や学年段階でのねがいに支えられて、教科のねがいに支えられて、授業のねらいが定まってくるのであり、また 1 時間 1 時間の授業でそのねらいを 1 つずつ実現していくことを通じて初めて、学期や学年のねがい、教科のねがいの方向に、学ぶ側 1 人ひとりを成長させていくことができるのである。

5. (1)ねらいを堅持して授業を行えば、授業それ自体のあり方が変わってくることはいうまでもない。

(2)いや正確に言えば、これによって授業自体のあり方を大きく改善・改革する可能性が開けてくるのである。

6. (1)まず第 1 に、ポイントがはっきりしていれば、どんなに臨機応変の活動をして、どんなに脱線しても大丈夫のはずである。

(2)授業もその場で気づいたことや思いついたことをやっていったとしても、ポイントはどこかできっちり指導しておきさえすれば、それでいいはずである。

(3)したがって、ダイナミックな、生き生きした授業がこれによって可能になる。逆に言えば、そういった闊達な展開を可能にするような形でねらいが設定されなくてはならないし、ねらいの追求もまたそういった形で行われなくてはならない。

(4)そのためには、ねらいの数がまず多くてはいけない。

(5)本質的な意味を持つ必要最小限のものに精選されなくてはならないのである。

(6)また、ねらいの追求にしても、1 つずつそれを達成していくといった「目標つぶし」的活動にならぬよう十分注意が必要である。

(7)ねらいとするポイントをとにかく最低限のものとして押さえつつ、ゆとりとふくらみと躍動をめざした授業が展開されるのでなくてはならないのである。

7. (1)第 2 に、教師の側のねらいを学ぶ側のねらいに転化していく努力をすることによって、

焦点のはっきりした学習ができるようになる。

(2)何のためにこういうことをやっているのかわからないままであつては、いくらよく勉強していったとしても、長い目で見た成長をはかることはできない。

(3)自分なりの目標をもって、それに向かって自分なりに努力し、そして自分の現状がこのままでいいか判断して自分を励ましつつやっけていく、ということになっていかななくてはならないのである。

(4)教師の側にねらいもねがもないままで、学ぶ側にだけそれを期待しても無理というものであろう。

(5)もちろん、学ぶ側の 1 人ひとりが自分なりにねらいを、そして自分なりのねがいを持つようになるためには、それなりの手だてを工夫しなければならない。

(6)そして、1 人ひとりが自分なりのねらいやねがいを追求する形で学習し、その成果を自己評価しつつ自己統制をかけながら自ら伸びてゆけるようにするためには、さまざまの工夫が教育の過程でなされなくてはならない。

(7)しかしそれにしても、まず教師の側でポイントが見えていないなら、どうしようもないであらう。

8. (1)第3に、このような授業を積み重ねていったときにはじめて、**すべての学習者に対して、基礎的基本的な共有の学力と、1人ひとりなりの個性的成長に必要な体験や諸能力といった基盤が保障される、**という点を見落としはならない。

(2)学校教育は、結局のところ、学ぶ側 1 人ひとりが身につけたもの、伸びた姿、という結果によってその成否が判断されるのである。

(3)プロセスがどんなに素晴らしくても、結果が不十分であれば、学校教育としては失敗である。

(4)だからこそ、授業の中でだれもが目を輝かしていたからといって安心することはできないし、またドリルばかりやって目に見える学力がついただけで満足するわけにもいかない。

(5)1 時間の授業の中に、あるいは 1 単元の授業の中に、学力保障と成長保障の両要素が、有機的にからみ合った形で十分に組み込まれていなくてはならないのである。

P61 ~ 64

[コメント]

私の尊敬する梶田叡一先生の教育評価の標準的なテキスト、基本書。高等教育を含む学校教育だけではなく、すべての民間教育にたずさわる先生方は、本書を 1 ページから最終ページまで文字通り「精読」をし、教育評価とは何かを自分の力で「理解」した上で、毎日の教育にあたると、児童・生徒・学生にとって極めて有益であるだけではなく、先生自身の成長にも直結すると確信する。

— 2012 年 9 月 23 日 林 明夫 記 —